

侑

京都大学

【目的】神経眼科，斜視弱視外来における障害者手帳取得状況について検討する。

【方法】神経眼科，斜視弱視外来において研究への同意を得られた647人を対象に，障害者手帳に相当する視覚障害の有無および手帳の取得状況を検討した。

【結果】手帳相当の視覚障害は37人(5.5%)に認められた。そのうち17人(45.9%)が手帳未取得であった。視力，視野，性別，診療期間，年齢を投入し，手帳の取得に対してロジスティック回帰分析を行うと，視力が当てはまらないこと(オッズ比5.89倍， $P=0.036$)，診療期間が短いこと(オッズ比5.10倍， $P=0.037$)が手帳未取得のリスク因子であった。

【結論】ロービジョンケアの入り口にもなる手帳取得について，十分でない現状が示された。

23. 滋賀医大における心因性視覚障害の最近の傾向

○岩佐真紀，村木早苗，東山智明，大路正人

滋賀医科大学

対象は1996年から2015年に当院で心因性視覚障害と診断された139例(男28例，女111例)。1996年から2005年に受診したA群(61例)，2006年から2015年に受診したB群(78例)に分け，年齢，性別，受診動機，視力，推定原因を比較検討した。

平均年齢はA群9.4歳，B群10.0歳。性別はA群男10例，女51例，B群男18例，女60例。受診動機は両群とも学校検診が最多で，推定原因はA群では家庭，B群では学校が最多であった。初診時裸眼視力が0.1未満の例はA群5%，B群19%，レンズ打消し法に反応しない例はA群21%，B群62%といずれもB群に多く認められ

た。

近年当院での心因性視覚障害は裸眼視力が悪く，かつレンズ打消し法に反応不良例が多く，原因も学校が増加傾向にある。

24. 心因性視力障害症例における調節検査の有用性

中村 葉¹⁾，小室 青¹⁾，中島伸子²⁾

1)四条烏丸眼科小室クリニック(京都市)

2)中島眼科クリニック(箕面市)

【目的】心因性視力障害を疑った症例の調節安静位や近方負荷時における調節変動量の測定および検討。

【対象および方法】心因性視力障害疑い42例，正常症例167例に，負荷調節レフARK-1s(ニデック)で調節検査を行い，調節安静位および近方負荷時の調節変動量を測定し比較検討した。

【結果】安静位の調節変動量は心因性 $0.40 \pm 0.22D$ ，正常症例 $0.13 \pm 0.01D$ ，近方負荷時の調節変動量は，心因性 $0.75 \pm 0.35D$ ，正常症例 $0.53 \pm 0.10D$ で両者とも心因性症例で有意に大きかった($P<0.05$)。

【結論】ARK-1sにより心因性視力障害疑い症例での調節変動量を数値化し，正常症例に比して調節痙攣の状態であることが確認できた。

25. 小児軽度遠視の診断における調節検査の有用性

○中島伸子

中島眼科クリニック(箕面市)

【目的】軽度遠視診断における調節検査の有用性の検討。

【対象・方法】シクロペントレート点眼下球面度数(cyp値)が2D以下の遠視12例20眼(7.9 $\pm$ 1.6歳)を対象に負荷調節レフARK-1s(ニデック)を用い調節検査を行った。ARK-1sでの球面度数の最大値(FarP)を求め，視力検査での球面

度数とともに cyp 値と paired-t 検定にて比較検討した。

【結果】cyp 値($1.2 \pm 0.53D$)は視力検査における球面度数($0.45 \pm 0.61D$)と有意差を認めた($P < 0.001$)が FarP($1.01 \pm 0.49D$)とは有意差を認めなかった。

【結論】ARK-1s による調節検査は軽度遠視診断に有用であった。

26. 若年で発症した強度近視性固定内斜視に対する手術治療の経験

○中井義典, 稗田 牧, 宮谷崇史, 石田 学, 鎌田 さや花, 張 佑子, 中村 葉, 外園千恵
京都府立医科大学

【目的】強度近視性固定内斜視は、上直筋と外直筋およびその周囲の結合組織が菲薄化して生じる。今回若年で発症した固定内斜視の症例を報告する。

【対象】症例は28歳女性。進行する左眼の内斜視を主訴に受診。右眼($0.9 \times S - 16.00D$ C $-1.50D$ Ax 160°), 32.35 mm, 左眼($0.15 \times S - 18.00D$ C $-2.00D$ Ax 20°), 33.08 mmであった。90PD内斜視を認め、MRIにより上直筋および外直筋の偏位を確認し、横山法で上外直筋連合術を施行した。

【結果】術後35PD内斜視と眼位は改善した。

【結論】この斜視は高齢者に発症すると考えられるが、若年でも著しい長眼軸の場合は同様の機序で発症し、横山法が著効する。

・セッション7

座長：池田華子(京都大学)

27. OCT Angiography を用いた圧迫性視神経症における視神経乳頭の血流評価

○河合健太郎¹⁾, 藤本雅大¹⁾, 横田 聡¹⁾, 宮本和明²⁾, 宮田 学¹⁾, 村岡勇貴¹⁾, 畑 匡侑¹⁾

1) 京都大学

2) 京都医療生協・中野眼科医院(京都市)

【目的】圧迫性視神経症(CON)の視神経乳頭内および乳頭周囲網膜内の血管構造を評価し、正常眼および緑内障性視神経症(GON)との比較検討を行う。

【方法】CON 15 人 24 眼, GON 23 人 23 眼, 正常(NOR)22 人 25 眼について, OCT Angiography を用いて計測した視神経乳頭内全層, 視神経乳頭周囲の網膜浅層の血管密度(各 NH, RPC), SD-OCT での乳頭周囲網膜神経線維層(cpRNFL)厚, ハンフリー視野の MD 値を比較検討した。

【結果】NOR に比べて, CON, GON は同程度の視野障害, cpRNFL 菲薄化を認めた。CON, GON とともに cpRNFL 菲薄化部位に RPC 低下を認め, RPC と cpRNFL 厚は正の相関を認めた。一方, NH は, CON でのみ有意に減少していたが, cpRNFL 厚との相関は認めなかった。

【結論】CON では, GON 同様, 網膜神経線維障害に一致した乳頭周囲網膜内の血管密度減少を認めた。

28. 緑内障眼における OCT angiography と視野の関係

○一山悠介, 南川貴之, 丹羽雄一, 大路正人
滋賀医科大学

【目的】OCT angiography を用いて視神経乳頭毛細血管(RPCs)血管密度を測定し、緑内障眼の視野障害との関連を検討する。

【対象と方法】緑内障群43例72眼, 正常群20例20眼。OCT angiography は 6×6 mmの画角で視神経を中心に撮影した。

【結果】OCT angiography により計測された RPCs 血管密度は, 緑内障群38.9%, 正常群46.7%で, 緑内障群が有意に減少していた($P < 0.01$)。MD 値と RPCs 血管密度の間には有意な相関を認めた($P < 0.01$, $r = 0.64$)。